様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０８４３

研究課題名（和文）幼児期から児童期にかけての社会性の獲得に関する発達的検討：発達の多様性の観点から

研究課題名（英文）Longitudinal study on children's social and scholastic links in childhood: How does it develop variously?

研究代表者
伊藤　順子（ITO, Junko）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０３３１８４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，家庭・仲間・教師という環境の中で，幼児期から児童期の環境移行期に，いかに社会性を獲得し，それが対人関係や学習場面に作用するかを縦断的に検討した。その結果，①幼児期から児童期にかけての社会性の獲得に関与する環境要因と個人内要因との関連が明らかになった。また，②環境要因・個人内容要因との関連を縦断的・質的に分析することによって，環境移行期の子どもが「自己」を主体としていかに社会性を獲得しているかという「個」×「環境」モデルを提案することにより，発達の多様性を明らかにした。さらに，研究結果をもとに，今後の子育て支援の在り方を提言した。

研究成果の概要（英文）：This study examined how children get the sociality in the environment on peer, family and teachers, and whether those facters acted on an interpersonal relationship and learning.
As a result, the relation between the environmental factors and the individual factors on acquisition the sociality from infancy to the puerility was suggested. Furthermore, how a child of an environment transitional period got the sociality based on ‘oneself’ was suggested by longitudinal and qualitative analyzing environmental and personal factors.These results proposed developmental diversity of social and scholastic links in childhood and the validity of “child”*“environment” model. And the state of the child rearing support was proposed based on “child”*“environment” model in practicing way.

研究分野：発達心理学

キーワード：社会性　学び　発達　多様性　環境移行期　幼児　児童　変容過程

１．研究開始当初の背景

幼児期から児童期にかけて、子どもの社会的環境は急激な変化をとげる。幼稚園・保育園入園は、ほとんどの幼児とって、家庭環境以外の異なる環境に移行する初めての経験であり、集団生活への環境移行期である。さらに、幼児期から児童期にかけては、生活の中心が「遊び」から「学習」へと変化する。それとともに、幼稚園・保育園の緩やかな集団で許されていた行動の自由や友だちの選択が制限され、高度な秩序を持った構造化された集団での活動が要求される。近年、こうした幼稚園・保育園から小学校への環境移行期に不適応を示す子どもが増加し、「小１プロブレム」「幼小の段差」といった問題が浮かび上がってきている(文部科学省　2010)。こうした問題に対して、幼小の接続の観点から、発達や学びの連続性を踏まえたカリキュラムや、スムーズな移行を促す「資質の高い教師育成プログラム」等の提言がなされている(e.g. 松嵜・無藤、2013)。上述のように本邦では、これまで子どもの発達と学びの連続性という観点から、カリキュラム開発や、教員養成といった環境の改善が重視されてきた。

一方で、子どもは移行期に、環境から影響を受けるだけではなく、自らも環境に働きかけながら変容している。海外の縦断的研究では、幼児期の向社会的行動傾向は、児童期・青年期まで一貫するものがあり(Eisenberg、Guthrie、 Murphy、 Shepard、 Cumber、 & Carlo、 1999)、向社会性の個人差は幼児期に培われること、さらに、幼児期の向社会性や道徳性の個人差は、就学後の仲間関係(Dunn、 Cutting、 & Fisher、 2002)や学業成績(Normandeau & Guay、 1998)に影響を与えることが明らかにされている。文化的・社会的背景が異なる本邦でも同様の傾向があるのか、あるいは、独自の傾向が示されるのであろうか。社会性の発達を段階としてではなく変容過程として縦断的にとらえ、発達と学びの連続性について関係発達論的な視点から検討することは、子どもの発達の多様性を理解し、今後の教育の方向性を考察する上で重要であると考える。

２．研究の目的

平成 20 年度の学習指導要領・幼稚園教育要領の改善の方向性として、「生きる力」の理念の共有があげられている(文部科学省 a・b・c、 2008)。子どもを取り巻く社会的環境が激変している現代こそ、幼児期から児童期にかけての「生きる力」の育ちを、子どもたちがいかに自己を主体とし環境とかかわりながら社会性を獲得しているか、多面的、複合的な視点からとらえることは重要な問題である。また、そこから、発達と学びの連続性を保障する新たな教育的示唆が得られるであろう。そこで、本研究では、幼児期から児童期の環境移行期に、家庭、教師、仲間という環境の中で、いかに社会性を獲得するのか、さらにそれが対人関係や学習場面でどのいかに作用するのか縦断的に検討する。本研究の目的は、社会性の獲得における「個×環境」モデル(Ladd, Brich , & Buhs 1999)を基に、発達の多様性を明らかにし、今後の教育・保育の方向性を提言することである。

３．研究の方法

本研究では、幼児期から児童期の環境移行期に、家庭、教師、仲間という環境の中で、いかに社会性を獲得するか、さらに、それが対人関係や学習場面でいかに作用するのかを縦断的に検討した。そこで、以下の 2 点に注目した。

(1)　子どもの「個」の発達をみるためには、文化的・社会的文脈を知ること、つまり、子どもが日々どのような環境で生活し、学習しているかという文脈を考慮することが重要となる(Selman、 2002)。「基盤研究(C)H19～平成 22 年 度幼児期の向社会的行動と社会化に関する発達的検討」(伊藤, 2011)では、3 歳入園児を対象に、入園前年度から卒園年度までの 4 年間、家庭、教師、仲間という環境の中で、幼児が「自己」を主体としていかに向社会的行動を学習するかを検討した。しかし、幼児期に焦点を当てているために、発達モデルが学校文化という文脈を背景とする児童期以降に適用できるかは明らかにできなかった。また、幼児期という発達段階を考慮したため、学習や学びという視点は取り入れられていなかった。そこで、本研究では、幼児期の社会化の過程が、児童期以降の学校文化での学習に関与するか否かを検討し、幼児期から児童期の環境移行期における「個」×「環境」モデルの妥当性を明らかにする。

(2)　子どもの社会的行動は、過去から現在、現在から未来という連続性の中で変容する。よって、子どもの社会化の過程を明らかにするには、「前発達段階の仲間との相互作用が、いかに次の発達段階の社会性に関与しているか」、あるいは「前発達段階の社会性がいかに次の発達段階の仲間関係に関与しているか」という時間的連続性に視点を当てた研究が必要である。これまでの、横断的発達研究では、一時点でのデータの分析結果から、社会性や仲間関係が検討されることが多かった。しかし、そうした視点からは「自己」を媒介とした個の社会性の獲得過程や、その多様性は見えてこない。動機が不明瞭で利己的な行動を行っているように見えながら、その次の段階に向けた重要な質的変容があり、それが社会性の獲得に影響を与えている(伊藤、 2011)。さらに、児童期以降は自尊感情が芽生え始める(浅野、2002)ことを踏まえると、社会性の獲得は自尊感情の芽生えに関与するとともに、学習活動への意欲や態度にも関与していることが予想される。そこで、本

研究では、環境移行期にある子どもを対象とし、幼児期から児童期にかけて、子どもがいかに社会性を獲得し、それが対人関係や学習場面でどのように作用するのかを縦断的に検討する。社会性に関しては、規範面である向社会性、道徳性と社会的スキルに焦点をあてる。学習活動は、発達と学びの連続性の観点から、「遊び」と「学び」の動機づけとの関連に焦点を当て、縦断的データに関して質的分析を行う。

４．研究成果

年度ごとの研究結果を論述し、本研究の特色・独創的な点、および意義を考察する。なお，本研究は，「基盤研究(C)H19～平成 22 年 度幼児期の向社会的行動と社会化に関する発達的検討」(伊藤，2011)の研究を受け，3 つの追跡調査群を設定した。

① C1：平成 23 年度 4 歳児
（平成 22 年度からの追跡調査群）
② C2：平成 23 年度 5 歳児
（H21 年度からの追跡調査群）
③ C3：平成 23 年度小学 1 年生
（H21 年度からの追跡調査群）

(1) 平成 23 年度は、環境移行期における向社会性・道徳性の発達と環境要因との関連を明らかにするために、以下の 5 つの研究を行った。

① 研究 1・2 では、第 1 縦断群 C1（4 歳児）第 2 縦断群 C2(5 歳児）の幼児を対象とし、道徳性（向社会的判断）と仲間との親密性・傍観者（第 3 者）・仲間関係との関連を検討した。その結果、4 歳から 5 歳にかけての良好な仲間関係を築いている幼児は、より内在化された動機づけに基づいて道徳的判断（向社会的判断）を行っていること、特に、傍観者のいる場面で見知らぬ他者を助けるという判断を多く行うことが示された。先行研究では、自分(I)と困っている子ども(You)との 2 者間では、親密性が高い方が向社会的判断を多く行うことが示されている。本研究の結果は、傍観者という第 3 者(They)の存在が親密性と関連している可能性を示しており、向社会性の獲得と環境とのかかわりを質的に検討し、その発達的変容を明らかにする必要性を示唆するものである。

② 研究 3 では、第 2 縦断群 C2（5 歳児 平成 22 年度からの追跡調査群）の幼児を対象に社会性と仲間関係の関連を縦断的に検討した。その結果、4 歳から 5 歳にかけて継続した仲間関係を築いていなかった幼児は、5 歳時点で不注意や多動といった問題行動がみられると教師から評価をうけていることが示された。幼児期は、日常生活における仲間との相互作用の中で情緒的な結びつきを深め、社会性を培っていることが示唆される。

③ 研究 4 では、C3（小学 1 年生 H21 度 4 歳児からの追跡調査群）を対象に、仲間関係、道徳性、社会的スキルについての調査を行った。さらに、実際の学習場面での観察調査を実施した。その結果、「遊び」の質が、仲間関係、道徳性、社会的スキル、「学び」に関連していること、それらの関連性は一様ではなく、環境移行期における発達の多様性が示唆された。

④ 研究 5 では、幼児期の道徳的判断を明らかにするために、食の自己管理（好きなお菓子ばかり食べる・嫌いな野菜を食べない）に関する幼児の善悪判断に及ぼす環境の影響を検討した。その結果、これらの自己管理違反について、幼児は権威依存性がないと判断している可能性が示唆されるとともに、年長者の方がより自己管理違反が悪いと判断することが示された。

⑤ 研究 6 では、他者を気づかって嘘をつくことと、嘘をつかずに真実を告げることのそれぞれについて、大人と幼児の善悪判断を比較した。その結果、大人はうそを容認するのに対して、幼児（5 歳児）は、むしろ真実を告げることが良いと判断することが示され、善悪判断における発達的傾向が示唆された。

(2) 平成 23 年度の研究より、幼児期は、日常生活における仲間との相互作用の中で情緒的な結びつきを深め、社会性を獲得していることが示され、社会性の獲得について、「個」×「環境」モデルを基に、「自己」を主体とした発達の多様性を明らかにする必要性が示唆された。

そこで、平成 24 年度は、環境移行期にある 2 つの年齢集団(C2・C1)を対象とし縦断調査を 2 つ行った。第 1 縦断群(C1)は、研究 1 と同じ対象者であり、3 年保育(3 歳入園児)、2 年保育（4 歳入園児）といった保育歴が異なる幼児で構成されている。こうした保育暦の違いが、小学校への環境移行期の社会性の獲得や学習活動に差異があるか否かを検討するために対象群とした。第 2 縦断群(C2)は、平成 24 度小学 1 年生であり、平成 20 年度からの追跡調査群である。調査では、学習活動、対人関係、社会性（道徳性）を評定し、多面的・縦断的視点から分析した。

① 研究 7 では、小学 1 年(C2)を対象に学習場面・自由遊び場面における仲間関係と社会性（生命に関する概念）との関連を検討した。さらに、平成 24 年度は、小学入学といった環境移行期であることを考慮し、縦断群 C2 に加え、同学年の児童全体(C4)も対象として、学習場面、自由遊び場面における仲間関係を検討した。その結果、幼児期の 4 歳から 5 歳にかけて継続した仲間関係を築いていなかった子どもは、5 歳児時点で不注意や多動といった問題行動が示されたが、小学入学とい

う環境以降ではそれらの関連は示されなかった。
　幼児から児童にかけて、日常生活における仲間との相互作用の中で情緒的な結びつきを再構築し社会性を獲得していること、そして、これが学習（「学び」の動機づけ）に関連していることが示唆された。環境移行期における、社会性と集団での「学び」との関連が幼児期から児童期にかけて変容することを示す結果であり、発達の連続性の観点から質的に検討することを示唆するものである。

②　研究 8 では、小学 1 年生（C2）を対象に道徳性（善悪判断）に及ぼす権威（親の容認や叱責）の影響を検討した。対象児は、平成 22 年度（4 歳児）からの追跡群である。幼児期から児童期にかけての善悪判断の変容を検討した結果、幼児期から児童期にかけて、親の容認や叱責に対する善悪判断の差違は示されなかった。児童期中期以降の善悪判断の様相について追跡調査を行い、道徳性の発達を明らかにする必要があろう。

(3)　平成 25 年度は、発達と学びの連続性を明らかにするために、①研究 1 では、追跡縦断群のデータについて質的分析を試みるとともに、研究成果の妥当性の検討を行った。さらに、②幼児期から児童期にかけての社会性の発達を学びと動機づけの視点から考察するために、公開シンポジウムを企画・話題提供するとともに、③向社会性研究、道徳性研究の国内外の動向を探り、研究成果の妥当性を検証するためシンポジウムを企画した。

① 研究 9 では、研究 1・2 の結果を受けて、縦断群 C1・C2（平成 23 年度 4・5 歳児）の道徳性の質的データ分析を行った、その結果、自己(I)・困窮者（YOU）のみならず、第 3 者(THEY)の存在が向社会性の発達に重要な役割を果たしていることが示唆された。
　従来の研究では、第 3 者の存在は、利己的動機と関連するものであり、未熟な段階の向社会的判断であると捉えられてきた。しかしながら、本研究の結果は、道徳的アイデンティティの確立における、第 3 者という環境の重要性を示すものであり、社会性を育む環境構成・カリキュラム作成の際の検討点となろう。

②　幼児教育の質や社会性の獲得が、就学後の学力と関連しているという PISA の提言を受け、学校教育における「読解力」と幼児教育とのインターラクションについてシンポジウムを企画・話題提供した。シンポジウムでは、関係論的発達論を基に、領域横断的（社会心理学・認知心理学・臨床心理学）に研究助言を求め、幼児期から児童期に関する社会性獲得に関する研究課題を再考察した。その結果、社会性の獲得は、就学後の「学び」の動機づけと関連していることが示唆された。

③　向社会性研究、道徳性研究の国内外の動向を探り、研究成果の妥当性を検証するためシンポジウムを開催し、幼児期から児童期にかけての社会性研究を道徳教育の接点について議論した。道徳性研究の分野の研究は、多岐にわたり、研究者間での領域横断的な共通理解がなされていないこと、さらには、教育現場からは、道徳性研究との接点が少なく、道徳教育実践における理論的背景の理解が困難であることが指摘された。今後、研究横断的な情報交換をもとにして、理論と実践との関連から道徳教育の可能性を考える必要が提言された。

(4)　最終年度である平成 26 年度は、①平成 23 年度から平成 25 年度までのデータを関係論的発達理論から質的に分析・考察した。また、平成 25 年度のシンポジウムの結果を受けて、②幼児期から児童期にかけての社会性の発達を学びと動機づけの視点から考察・検証するために、公開シンポジウムを企画した。さらに、③地域に研究成果を公表し、子育て支援との実践の接点を探った。

①　研究 9 では、平成 23 年度から平成 25 年度までの追跡調査群の観察データを関係論的発達理論から質的に分析・考察し、量的分析結果との関連を考察した。その結果、幼児期から児童期にかけての社会性の獲得と環境要因の関連の多様性が明らかになり、「個」×「環境」モデルの理論的妥当性が示唆された。

②　平成 25 年度から引き続き、幼児教育の質や社会性の獲得が、就学後の学力と関連しているという PISA の提言を受け、学校教育における「読解力」と幼児教育とのインターラクションについて、読解力を育む「学び」のしかけについて領域横断的（認知心理学・教育心理学・保育学）に助言を求めた。その結果、保育・教育現場での実際の子どもの姿から、学びの視点や動機づけを読み取り、発達の連続性をふまえた「学び」のしかけを再考する必要性が示唆された。特に「読解力」に関しては、これまで認知的側面を中心に研究が積み上げられてきたが、研究成果を実践（保育・教育）にいかに生かすかが重要であることが示唆され、幼児期の生活の中の感動・興味・関心に対する大人（保育者・保護者）の感性が重要であること、幼児期は子どもが物語の中にあり、絵本の内容は日常生活の社会性の獲得、読解力の育成につながっていることが示唆された。

③　研究のまとめとして、本研究結果を地域に還元し、幼児期の「遊び」と「学び」との関連から、これからの子育て支援の在り方を提言した。従来の子育て支援は、『いつ』・『何』を提供するかといったイベント的要素

に重点を置いた企画が多いことが子育て支援者から指摘された。今後は、社会性の発達に関する研究知見を元に、自分の子どもの発達を楽しむ・ともに成長するという側面を充実させる内容の企画構成を地域とともに考えていく必要性が示唆された。

(5)　本研究の特色・独創的な点、および意義は以下の 4 点にまとめられる。

①　幼児期から児童期にかけての社会化の獲得に関与する環境要因と個人内要因との関連を明らかにした点、
②　環境要因・個人内要因の相互作用を縦断的に検討することによって、環境移行期の子どもが「自己」を主体としていかに社会性を獲得しているかという「個」×「環境」モデルを構築・検証した点、
③　「個」×「環境」モデルから、発達の多様性が明らかになった点、
④　「個」×「環境」モデルを基に、社会性の育成に関する教育・子育て支援プログラム、道徳性育成カリキュラムの基本資料を提供できる点、である。

＜引用文献＞

① 浅野 智彦、現代社会の自尊感情－自信から対話へ、児童心理、56、2002 年、609-614
② Dunn J, Cutting L, & Fisher N., Old friends, new friends: Predictors of children's perspective on their friends at school, Child Development, 2, 2002, 621-635.
③ Eisenberg N., Guthrie K., Murphy C., Shepard A., Cumberland A, & Carlo G., Consistency and development of prosocial dispositions: A longitudinal study, child Development, 70, 1999, 1360-1372.
④ 伊藤　順子、基盤研究(C)H19～平成 22 年 度幼児期の向社会的行動と社会化に関する発達的検討、2011 年.
⑤ Ladd G., Brich S., & Buhs E., Children's social and scholastic links in kindergarten: Related spheres of influence?, Child Development, 70, 1999, 1373-1400.
⑥ 松嵜　洋子・無藤　隆、小学校生活科と幼児教育とのつながり－接続期カリキュラムの検討をとおして－、教育福祉研究年報（白梅学園大学・短期大学） 18, 2013 年、39-46.
⑦ 文部科学省、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」、2010 年 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf
⑧ 文部科学省 a、現行学習指導要領の基本的な考え方、2008 年 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/
⑨ 文部科学省 b、小学校学習指導要領解説生活編、日本文教出版、2008 年
⑩ 文部科学省 c、幼稚園教育要領解説、フレーベル館、2008 年
⑪ Normandeau S. & Guay F., Preschool b behavior and first-grad school achievement: The mediational role of cognitive self-control, Journal of Educational Psychology, 90, 1998, 111-121
⑫ Selman L., Risk and prevention: Building bridges between theory and practice, New Direction for Child Development, 98, 2002, 43-55.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① 越中　康治、攻撃行動に対する幼児の善悪判断に及ぼす攻撃者の権威の影響、幼年教育研究年報（広島大学大学院教育学研究科付属幼年教育研究施設）、査読なし、33 巻、2011 年、97―103

〔学会発表〕（計　11 件）

① 伊藤　順子、仲間の中で育つ人間関係－幼児の向社会的判断における他者の役割とは、日本発達心理学会第 56 回大会、2014 年 11 月 8 日、神戸国際会議場（兵庫県）
② 伊藤　順子、幼児期における学びの動機づけとは－インフォーマル学習における「学び」の芽生えに注目して、日本保育学会第 67 回大会、2014 年 5 月 17 日、大阪総合保育大学（大阪府）
③ 伊藤　順子・樟本　千里・村山　麻予・畠山　美穂・畠山　寛・二宮　克己、道徳性と動機づけ研究の可能性について探る、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 21 日、京都大学（京都府）
④ 伊藤　順子、向社会性の育ちと環境－仲間関係の中で育つ向社会性とは？、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 21 日、京都大学（京都府）
⑤ 伊藤　順子・湯澤　美紀・片山美香・山崎　晃・森　敏昭、学校教育における「読解力」と幼児教育とのインターラクションとは－PISA の提言をうけてのプロセス検討の試み、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 17 日、法政大学（東京都）
⑥ 越中　康治・伊藤順子、偏食に対する幼児の善悪判断に及ぼす親の反応の影響、日本発達心理学会第 24 回大会、2013 年 3 月 13 日、明治学院大学（東京都）
⑦ 越中　康治・伊藤順子、儀礼的なお世辞に対する幼児・児童の善悪判断、日本教育心理学会第 54 回総会、2012 年 11 月 25

日、琉球大学（沖縄県）

⑧ 伊藤　順子、学校段階における動機づけの発達：向社会性と動機づけ、日本発達心理学会第 23 回大会、2012 年 3 月 9 日、名古屋国際会議場（愛知県）

〔図書〕（計　3 件）

① 伊藤　順子他、幼児学用語集　社会性の発達、北大路書房、2013 年、56-58

② 伊藤　順子他、パーソナリティ心理学ハンドブック　乳幼児期　社会性の形成、福村出版、2013 年、188-194

③ 越中　康治、心理学研究の新世紀③教育・発達心理学　道徳性の発達、ミネルヴァ書房、2012 年、222-237

６．研究組織

(1)研究代表者

伊藤　順子　（　ITO junko　）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０３３１８４４

(2)研究分担者

越中　康治　（　ETCHU koji　）

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０４５２６０４